



▲荒浜小学校外観



▲3.11 荒浜の記憶 (4階展示室)

▲1階廊下

震災遺構 仙台市立荒浜小学校

東日本大震災の津波で被災した荒浜小学校の校舎を整備し、「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」として4月30日から一般公開を開始しました。本施設は、東日本大震災の遺構として常時内部を公開する初の学校施設となります。

校舎内部では、被災した校舎のありのままの姿と被災直後の写真展示、関係者の証言や当時の映像をもとに発災当時を振り返るドキュメンタリー映像等により、津波の威力や脅威を実感していただくとともに、荒浜地区の歴史や文化・小学校での思い出などを伝え、地域の記憶の拠りどころとなるよう工夫がなされています。

住所	仙台市若林区荒浜字新堀端32-1	開館時間	10:00-16:00
休館日	月曜日、第2・第4木曜日(いずれも祝日の場合はその翌日) 祝日の翌日(土・日曜日、祝日を除く)/年末年始/臨時休館日		
アクセス	地下鉄東西線荒井駅から仙台市営バス旧荒浜小学校行き終点下車。(約15分)		

問合せ先 館内は自由見学が基本ですが、案内が必要な場合は事前下記にご相談ください。

5月31日(木)まで 仙台市 まちづくり政策局 防災環境都市推進室 TEL 022-214-1117 (受付 平日10:00~17:00)

6月1日(金)から 震災遺構 仙台市立荒浜小学校 管理事務所 TEL 022-355-8517 (受付 休館日除く10:00~16:00)

お知らせ

●「仙台防災未来フォーラム2017」を開催しました



仙台防災未来フォーラム2017

— 経験を伝える・共有する・継承する —

震災の経験や教訓を世界や将来へどのように伝えるかについて考えることを目的に、3月12日に開催された「仙台防災未来フォーラム2017」。延べ約1,600名の方が来場され、活発な意見交換や交流が行われました。

フォーラムでは、地域のまちづくり、若い世代への経験の伝承、女性や障害者の参画などの複数のテーマによるセッションが開催され、具体的な取り組みの発表や議論が行われました。また、ブース展示やミニプレゼンテーションでは、防災・減災に取り組む地域団体、NPO、企業、学生等が自分たちの取り組みを発信しました。

クロージングでは全体の報告の後、コメンテーターに国連国際防災戦略事務局 (UNISDR) 駐日事務所代表の松岡由季氏、公益社団法人 MORIUMIUS 代表理事の立花貴氏、コーディネーターに東北大学災害科学国際研究所の今村所長をお招きしたディスカッションが行われ、「それぞれが地に足の着いた取り組みを続けていることに勇気づけられた」「東日本大震災の学びを他地域の学びの土台にすることが重要」「身近な取り組みをぜひ海外にも発信を」などのコメントが出されました。



▲小学生の減災活動報告会(ともに考える防災・減災の未来~「私たちの仙台防災枠組講座」、「結」プロジェクト)合同報告会~)



▲尚絅学院大学ボランティアチームTASUKIの復興支援活動の紹介(ミニプレゼンテーション)



▲被災地の女性たちによる手仕事品の販売(ブース展示)



▲当日の議論を総括したクロージング

開催概要

- 日時** 平成29年3月12日(日)10時~17時
- 場所** 仙台国際センター展示棟
- 主催** 仙台市
- 構成** ①シンポジウム・セミナー※ テーマセッション(計6行事)、クロージング
②ミニプレゼンテーション:12団体
③ブース展示:53団体 等

※隣接会場で行われた「連携シンポジウム」3行事と一体的に開催。

発行 仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室
〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1
TEL: 022-214-8098
FAX: 022-214-8497
E-mail: mac001605@city.sendai.jp

編集 株式会社仙台紙工印刷
発行日 2017年5月

▶「えーる」は防災環境都市・仙台ホームページにも掲載しています。

<http://sendai-resilience.jp>

仙台市の取り組みから、市民の方々の取り組みまで、より詳しく紹介しています。

▶次号は7月発行予定です。

タブレットでも！
スマホでも！



この印刷物は「再生紙」を使用しています。



防災環境都市・仙台ニューズレター



「伝える」「繋げる」「備える」をエール
防災環境都市・仙台の市民情報誌です。

仙台市では、「杜の都」の豊かな環境を活かしながら、防災力のあるまちづくり、ひとははぐくむ「防災環境都市づくり」を進めています。「えーる」では、防災・減災や環境に関わるさまざまな分野で活躍する「ひと」に注目し、その取り組みを紹介していきます。

2017 No.4

テーマ
防災・減災
と
まちづくり

表紙インタビュー
伝える仙台

片平地区まちづくり会
・仙台市地域防災リーダー(SBL)
みぞい たかひさ
溝井 貴久さん(仙台市出身)

溝井さんと片平子供まちづくり隊 若井希さん(中)・上原梨沙さん(右)

子ども達に伝える、災害に強いまちづくり。

4年前、故郷の役に立ちたいという思いから、東京から地元の片平地区へUターンし、2年前から「片平地区まちづくり会」のメンバーとして活動を始めました。片平地区内には広瀬川が流れており、大雨時の水害対策が必要な地域です。マンションに住む一人暮らしの方や外国人の方が比較的多いのも特徴です。会では、平成22年に片平地区の歴史を学びながら巡ることができる「かたひらウォーキングマップ」を作成、震災後は地域の防災力向上に力を入れ、平成27年には「防災行動マップ」を作成・配布しました。また、当時の片平小学校の6年生が、片平のまちを盛り上げたいと「片平子供まちづくり隊」を結成し、さまざまな活動に取り組んでいます。

当地区はまちづくりの一環としての防災の取り組みが認められ「内閣府「地区防災計画」平成28年度モデル地区」に東北で唯一選定され、モデル事業として今年の3月5日に実施した「防災・宝探しゲーム」には、地域の小中学生と

外国人住民の計63名が参加しました。このゲームは、西公園から花壇・大手町地区、評定河原を巡って片平市民センターまで歩き、地域の自然や歴史・文化に触れながら災害時の避難場所を確認し、ともにまちを守る一員としての自覚と意識を高めるためのものです。地域の防災力を高めるには、そこに暮らす人々がつながり連携すること、多様な防災の担い手を増やし育てることが大切です。会では、子どもや外国人も巻き込んで、みんなが楽しめるイベントや防災訓練を積極的に行っていきます。若い世代の参加を重視し、20代、30代の人材を会員にスカウトし意見を積極的に取り入れる今野均会長の方針は、とても素晴らしいと思います。「仙台防災未来フォーラム2017」(裏表紙参照)でも、会長が私たちの活動を参加者の皆さんに紹介しました。自分の生まれ育ったまちの魅力や防災の大切さを、次代を担う子どもたちにしっかりと伝え、災害に強いまちづくりをより多くの人達に広めていきたいです。



▲謎解きの古文書で宝探しをする子ども達



▲閉会式では、宝探し達成の認定書を授与

片平地区まちづくり会

平成19年に立ち上げた片平地区平成風土記作成委員会から発展し、平成24年に「片平地区まちづくり会」として本格的な活動を開始。片平地区連合町内会など役員34名を中心に、地域の小中学生や若者、外国人住民も巻き込みながら、災害に強いまちづくりに取り組んでいる。



テーマ・インタビュー
繋げる仙台

大切な人とまちを災害から守るために。 地域を繋ぐ、防災宣言とSBLの活動。

岩切地区町内会連合会では、震災前から「岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会」のメンバーを中心に、地域ぐるみで防災・減災活動に取り組んでいます。今回は、仙台市地域防災リーダー（SBL）としても活躍している皆さんに、お話を伺いました。

※岩切地区同SBL角田美佐子さんは当日欠席

宮城野区岩切地区町内会連合会SBL
岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会代表

菅野 澄枝さん(写真左から)

1968年、黒川郡大和町生まれ。同会の代表、またSBLとして、各地の地域防災講座の講師やファシリテーターなどを務める。

宮城野区岩切地区町内会連合会SBL
いわきり防災エンパワーメント代表

伊藤 栄松さん

1951年、仙台市生まれ。交通安全協会岩切今市支部長を務める傍ら、地域の防災・減災を推進する同グループの代表として活躍。

宮城野区岩切地区町内会連合会SBL
民生委員・主任児童委員

育村 みどりさん

1963年、塩釜市生まれ。児童福祉を担当する主任児童委員として活動する傍ら、SBLとして主に小学校との連携を図る役割を担う。

宮城野区岩切地区町内会連合会SBL
みやぎ生活協同組合理事

緑上 浩子さん

1962年、岩手県二戸市生まれ。みやぎ生活協同組合理事を務める傍ら、SBLとして防災講座の開催や地域の防災マニュアル作成にも関わります。

人を繋ぎ、思いを繋ぐ、防災まちづくり

— 防災活動を始めたきっかけは何でしたか。

菅野 2010年4月、当時の宮城野区長の提案で、子育てサークルのメンバーや婦人防火クラブ、PTAなど、様々な立場の方に呼びかけ、「岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会」の活動を始めたのがきっかけです。各家庭で災害に備える「自助」、日頃からご近所の皆さんと信頼関係をつくり、災害時にはサポートし合う「共助」の大切さを自分たちの言葉でつづった防災宣言は、地域の人達を巻き込み、繋ぎ、支え合うネットワークづくりの第一歩になりました。

緑上 菅野さんの呼びかけで「つくる会」に参加し、子育てや介護で昼間も家にいることの多い主婦の目線で主体的に防災に関わり、自分達にできることを考え、行動していこうという意識が生まれました。行政や地域との連携や、会をまとめる菅野さんというキーパーソンの存在が、活動を進める上でとても大きかったと思います。

震災の経験を地域防災に活かすSBLの役割

— SBLとして、どんな活動をされていますか。

育村 東日本大震災が発生したのは、宮城野区の総合防災訓練で「岩切・女性たちの防災宣言」を発表した9ヶ月後でした。電気・ガス・水道のライフラインが止まり、通学路には石垣が崩れ落ち、たくさんの人が避難所に押し寄せました。「つくる会」のメンバーもそれぞれの立場で避難所に集まり支援を行いました。助け合える仲間がそこにいることは、とても大きな心の支えになりました。

菅野 一方で、混乱する避難所の中で、配慮が行き届いていない女性や子どもたち、高齢の方々に、何かお手伝いしますかと声は掛けられるものの、専門的な知識や経験を持たない私たちに出来ることは限られていました。もっと具体的に・実践的に学んでおけば良かったという反省や、日頃からの備えの重要性を痛感した体験から、「つくる会」のワークショップをサポートして下さったNPO法人イコールネット仙台が主催する「女性のための防災リーダー養成講座」に参加、続いて緑上さんと一緒に、「仙台市地域防災リーダー（SBL）養成講習」を受講しました。

緑上 現在、岩切地区町内会連合会では、自分も含めて5人のSBLが活動しています。防災訓練、救急救命講座の企画・運営や、岩切地区の防災マニュアル作成に女性の視点を活かす提案も行うほか、全国各地の地域防災講座では菅野さんが講師を務め、「つくる会」でも、震災の経験を踏まえてさらに内容を深めた「岩切・女性たちの防災宣言2015」を発表し、国連防災世界会議での安倍総理のスピーチでも紹介されました。大切な人、まちを守る地域との繋がりをより一層強くするために、学び、行動し、伝えていかねば、という思いを新たにしています。

伊藤 「つくる会」のSBLメンバーが中心となって、「いわきり防災エンパワーメント」というグループを立ち上げています。地域の防災意識の向上と世代を超えた交流を目的に、子ども達と一緒に「いわきり防災かるた」の作成を行うなど、次の世代にも震災の経験と教訓を語り継ぎ、地域の皆さんに「共助」の大切さを伝える活動を行っています。

地域の防災活動を世界へ

— 昨年は、海外からの研修の受入も行ったそうですね。

菅野 昨年の2月と12月に、JICA（国際協力機構）主催の研修で、ネパール・スリランカ・バキスタンなどから来日した各国の行政やNGOの皆さんに、指定避難所である岩切中学校の防災備蓄倉庫を見学していただき、私たちの防災活動が地域を繋いでいることや自主的な市民活動であることをお話しました。「仙台防災枠組2015-2030」にも、「自助」・「共助」や女性、子ども、高齢者の災害リスクを軽減する取り組みの重要性がうたわれています。私たちの経験や日頃の地域防災の取り組みを、海外の方々にもぜひ伝えていきたいですね。そして、地域で暮らす皆さんにSBLの活動をさらに知っていただき、防災・減災の取り組みを広げていきたいと考えています。



▲備蓄倉庫の見学(岩切中学校)



コラム

知ってみよう!

学べる仙台

「マルチステークホルダー」とは?

2015年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議において、今後15年間の国際的な防災指針「仙台防災枠組2015-2030」が採択されました。この枠組には、「より良い復興」「防災への先行投資」「防災の主流化」など、東日本大震災からの復興を進める私たちの経験が、重要な概念として取り上げられています。

この枠組の特徴は、政府や自治体、国際機関だけでなく、女性や子ども、企業など、多様な関係者（マルチステークホルダー）の役割を強調している点です。策定のプロセスでも、被災者など多くの方々からの意見を反映するなど、多様なステークホルダーの協議を経て採択されました。中でも、「女性、若者のリーダーシップ」が重要と発言されており、今後は女性や子どもも主役となり、防災・減災について学び、考え、行動することが大切です。

私たちの身近な内容が多く含まれている「仙台防災枠組」。あらゆる人や組織が参加し、互いに協力できる関係づくりが重要です。3月12日に開催された「仙台防災未来フォーラム2017」（裏面参照）でも、地域のまちづくり、若い世代への経験の伝承などの取り組みを様々な立場の方からご報告をいただきました。



▲特定非営利活動法人イコールネット仙台主催による被災地の女性をテーマにしたシンポジウム（3月12日「仙台防災未来フォーラム2017」）

取り組みはほんの些細なことからも始められます。身近なことから防災・減災について考えてみませんか？

指定避難所等に 防災対応型太陽光発電システムを導入しています

東日本大震災では、電気・ガス・ガソリン等の供給が途絶し、避難所運営などの初期対応においてさまざまな不都合が生じました。こうした経験を踏まえ、仙台市では災害時における自立的な電源を確保するとともに、平常時の二酸化炭素排出量の削減を図るため、市内の指定避難所等194ヶ所に太陽光発電と蓄電池を組み合わせた防災対応型太陽光発電システムを導入しました。



▲太陽光発電パネル



▲前田照彦主査

長期間の停電が発生しても、太陽光発電と蓄電池を組み合わせることによって、昼夜を問わず防災無線やテレビなどの情報通信機器、照明、コンセント等が使用可能になります。市担当の前田照彦主査は「震災のとき、充電切れで携帯電話さえも使えず多くの方がお困りになりました。いざという時にご活用いただければと思います。」と話しています。

仙台まちづくり政策局防災環境都市推進室
TEL 022-214-8057 FAX 022-214-8497



仙台市地域防災リーダー（SBL）

平成24年度より仙台市が独自の講習プログラムに基づいて養成している、町内会長などと協力しながら自主防災活動の中核を担う人材で、現在は市内で約600名のSBLが活動している。平常時は、防災訓練の企画・運営及び地域住民に対する啓発活動などを行い、災害時は地域住民の安否確認や避難誘導、避難所の開設・運営などに当たる。